

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：13501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520502

研究課題名(和文)電子コーパスによる現代中国語文法形成過程の実証的研究

研究課題名(英文) A demonstrative study of the development of Mandarin Chinese based on electric corpora

研究代表者

町田 茂 (MACHIDA, Shigeru)

山梨大学・教育学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：20238926

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：近年の中国語文法の研究は、言語事実の記述を目的としたものから、文法体系の背景に潜む原理の解明へと向かいつつある。現代中国語の研究は通常規範的共通語とされる普通話を対象としているが、普通話の文法は決して安定的ではなく、言える、言えないという判断を巡って個人差や地域差が存在する。本研究は、現代中国語の成立過程となる清末から民国初期の白話文資料に見られる言語変化に上記の個人差・地域差の原因を求め、中国語文法体系に生じた情報構造重視の傾向を検証した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of recent studies on Chinese grammar is changing from description of phenomena to determination of the principles that reside in the grammar system. In ordinary cases the subjects of researches of Chinese grammar are based on Putonghua (standard Chinese), but the grammar of Putonghua is somewhat unstable, the judgment on grammatical or ungrammatical sometimes depends on personal or regional differences. This research has investigated Baihua corpora published during the last stage of Qing dynasty and the early stage of Republic of China in search of the origin of the instability of Putonghua, and demonstrated the increase of the importance of informational structure in the Chinese grammar system.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：現代中国語 普通話 アスペクト 文法化

1. 研究開始当初の背景

近年の中国語文法の研究は、言語事実の記述を目的としたものから、文法体系の背景に潜む原理の解明へと向かいつつある。一般言語学において言語変化を誘発する原理として説かれる文法化(grammaticalization)は確かに中国語においても認められる現象であり、歴史の長い中国語では明清白話小説の言語の段階で既に相当量の文法化が発生していた。しかし、明確な形態変化を持たない中国語では、文法化した要素を含む文法構造は多義になりがちで、情報伝達上必ずしも効率的ではない。そのため、その後の現代中国語に至る過程では、文法化された要素の機能分化が進み、各要素の意味機能が限定され、それらと共起する要素の範囲も限定される傾向にある。そこで、本研究では、近年入手が可能になった清末から民国初期に出版された白話文を反映した言語資料を利用して、「文法化」が進行した後の現代中国語の形成過程を検証することにした。

2. 研究の目的

(1)本研究の目的は、明清白話小説の言語で高頻度で用いられた多義の文法形式が清末民国初期の白話文で整理され、特定の意味を有する各文法形式に分化される過程を検証することである。明清白話小説が反映する言語では、一つの文法構造・文法形式が多数の意味に対応しており、読者は語と語の意味関係から最も合理的な解釈を選択するという負担を課せられていた。本研究では特に量詞「個」やいわゆる動態助詞「過」を用いた構文の用例を収集し、現代中国語が形成される過程でどのような細分化が生じて行ったのかを考察することにした。

(2)本研究は、言語事実の記述にとどまらず、一般言語学理論にも大きくかかわる。通常文法化の過程は文法化前の状態から文法化後の状態への一方通行であり、文法化された要素が文法化前の状態に戻ることは無いとされている。この見識事態誤りではないが、中国語においては、文法化された要素の更なる体系化が重要になる。本研究は、文法化が更に一部の文法形式の淘汰を含む体系の細分化に向かうことを検証しようとするものである。

(3)中国語には形態変化が無いと言われている。確かに中国語には明確な語形変化は存在しないが、複数の語句の共起には相当の制約が存在する。例えば、動詞には「了」「着」「過」などの助詞や動作量表現・時間量表現・目的語や結果補語・方向補語・状態補語など様々な要素を付加できると認められているが、動詞が重ね型になるとそれと共起できる要素に大きな制約が生じ、動詞に「過」が付加されると、「過」の意味により共起できる要素の制約が異なってくる。本研究は、こうした広義の「形態」を形成する原理についても従来より一歩踏み込んだ検討を行おうとする

ものである。

3. 研究の方法

まず、清末民国初期に出版された白話文形式の新聞・雑誌類を業者発注により電子データ化した。電子データの検索は本研究にとって重要な基礎作業であるため、複数の検索語の共起も確認できるようなシステムを構築した。その上で、研究代表者が電子データを「個」を用いた文法構造(動詞+『他』+『個』)、「過」を用いた文法構造(動詞+『過』+数詞、動詞+『過』+『了』)といった諸条件で検索することにより用例資料(データベース)を作成した。その上で、動詞の種類・数量表現の性質(名量詞を使っているか動量詞を使っているか等)、「了」と共起しているか否か、といった各文法条件により用例を分類し、分類結果を現代中国語の規範的文法と比較した。

4. 研究成果

(1)現代中国語(普通話)の文法記述において、主語・述語・目的語、補語、修飾語などの文法成分が存在することが、あたかも自明の事実であるかのように扱われている。しかし、明清白話小説が反映する言語においては、目的語と補語は必ずしも明確に区別できていなかった。その要因は量詞「個」の存在で、文法化された「個」を動詞の後にかなり自由に付加することができたために、現代中国語では賓語とされる要素も補語とされる要素も「個」を介して動詞の後に置くことができた。その上、人称代名詞とされる「他」もまた文法化が進み、指示機能の無い「他」が各種の動詞の後ろに多用されたために、「動詞+『他』+『個』+A」という文法構造は多種多様な意味機能を獲得していた。読者は、語と語の意味関係から最も合理的な解釈を選択することを求められていたわけである。しかし、本研究が分析した清末民国初期の言語資料において、上記の文法構造は使用例が減少する。興味深いのは、言語資料のジャンルによって出現頻度が異なることである。特に娯楽性の高い口語小説では、上記の文法構造が「打他個片甲不留」のような固定した表現として定着し、いわゆる決まり文句として現代中国語まで受け継がれてきた。現代中国語の持つ多様性・規範の決めにくさは、清末民国初期の白話文の形成過程で生じた、新しい文体を使おうとする動機づけと、特定の雰囲気や醸成するために旧来の文体から引き継いだ決まり文句を保持しようとする動機づけの力関係に求めることができるだろう。

(2)一方、本研究が探究した動詞付加成分「過」の文法化過程は、今後のいわゆるアスペクト研究に新たな知見を導入する可能性を秘めていると考えられる。近年の文法研究において「有界(bounded)・無界(unbounded)」の区別が文法体系に大きな影響を及ぼしていると説かれている。ここでの「有界」は時間的・空間的に確定できる事象に相当し、「無

界」は個性が弱く、時間的・空間的に確定しにくい概念や活動に相当する。そして、「有界・無界」説は、「有界」特性を持つ要素は「有界」特性を持つ要素と結合しやすく、「無界」特性を持つ要素は「無界」特性を持つ要素と結合しやすいと主張する。動詞付加成分「過」は、文法化の過程で、本来の移動の方向を表す用法から、動詞が表す動作が完結し、基準時点では既に行われていないことを表す用法を生み出した。そして、現代中国語では、時系列的に並ぶ事象の中で、予見可能な動作が完結したこと、基準時点との関連で、かつてある動作が発生したこと(経験)の二つを表すことができる。さらに両者の用法には以下のような差異が認められる。

を用いる場合「動詞+『過』」の後ろの数量表現の使用が大きな制約を受けるが、助詞の「了1」「了2」とは共起する。一方「動詞+『過』」の後ろに数量表現を置くことができるものの、「了1」「了2」とは共起しない。

の否定形式は「没+動詞」であり、の否定形式は「没+動詞+『過』」である。現代中国語「過」のはこのように文法形式上かなり明確に区別できるが、明清白話小説が反映する言語では両者の区別は必ずしも明確でなく、共起可能な要素も類似していた。本研究が着目したのは数量表現との共起で、明清白話小説が反映する言語では、いずれも数量表現と共起できていたにも関わらず、清末民国初期の白話文では、の自由度が大幅に制限を受けるようになった。これは、「有界・無界」の区別からは予想不可能な現象である。「有界・無界」説の立場から見れば、有界の「過」は有界の数量表現と共起できるはずであり、明清白話小説の言語で可能であった両者の共起が後になって制限されることは言語変化の方向性の原則に違反する。研究代表者は、現代中国語(普通話)の形成過程においての「過」と数量成分の共起が制限を受けるようになったのは、中国語において、どの情報を活性化するかという情報機能がより重視されるようになったからだという予測を立てている。

(3)従来 of 文法研究において、中国語の名詞・動詞・形容詞に付加される文法成分として、数量表現・動態助詞・程度副詞などの存在が指摘されてきた。数量表現は事物の数量を数える機能を有し、動態助詞は動作の完了・持続等を表す機能を有し、程度副詞は客観的・主観的に認定された程度を表す機能を有するものである。しかし、現代中国語において、数量表現の多くが計数ではなく個体に関する情報を活性化(activate)する目的で用いられ、動態助詞「着」「過」は当該動作を背景的な事象として扱う目的で用いられ、程度副詞は当該の性状を現実世界で確認できる事象として扱う目的で用いられている。そして、こうした情報機能上の必要が生じたと

きは数量表現・動態助詞・程度副詞等がかなり義務的に用いられている。つまり、現代中国語の形成過程で、の「過」は情報機能上より背景(background)的になり、前景(foreground)的な数量表現とは情報機能上の衝突が生じたものと考えられる。こうした観点の傍証として、処置式と呼ばれる「把」字構造の述語における「過」の使用制限を上げることができる。「把」字構造は、介詞「把」によって導入される事物に加えられる動作やそれによって生じた結果を具体的に示す、述語部分を前景・重要情報として提示する文法構造である。歴史的に見ると、明清白話小説が反映する言語では、「把」字構造の述語中に「過」が用いられていた(張美蘭 2001『近代漢語語言研究』天津教育出版社)。しかし、現代中国語(普通話)中ではごく一部の場合を除いて「過」を用いることができなくなった。この事実は、清末民国初期を境に、「過」が背景的情報を提示するという情報機能を獲得したことを意味するものと考えられる。

(4)従来 of 中国語 of アスペクト研究は、まずアスペクト標識を認定し、それぞれが表す意味を記述するという方向で行われてきた。こうした研究は考察範囲をそれぞれのアスペクト標識が出現した用例に限定し、「有界・無界」説を運用して一定の成果をあげてきた。しかし、アスペクト標識と認定された要素は必ずしも義務的に用いられるわけではなく、必要・不必要の判断も母語話者の間で一定の揺れが存在する。こうした現象が生じる原因について従来満足な説明が与えられて来なかったが、「現代中国語が一定の文脈中における情報構造をより反映する言語に変質しつつある」という観点を導入することにより、数量表現・動態助詞・程度副詞、さらには時間副詞を含めたより大きな枠組みの中で文法形式の対立を生む情報構造の差異を解明するきっかけがつかめたのではないかと考えられる。特に名量表現と動量表現の間、数量表現と動態助詞の間には共起の可否においてかなり明らかな対立が見られ、こうした対立を一種の文法範疇の反映と考えることにより、中国語の言語事実に根差した新たな文法記述が可能になるのではないかと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

町田 茂、近現代中国語の動詞付加成分“過”の文法化と情報機能の変遷、山梨大学人間科学部紀要、査読無し、第 15 巻、2013、175 - 183

<http://www.lib.yamanashi.ac.jp/repository/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

町田 茂 (MACHIDA, Shigeru)
山梨大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：20238926

(2) 研究分担者

該当なし

(3) 連携研究者

該当なし